



君美河谷

利

ワ 3
1111
3





烏帽子虫衣

西宮花曰是烏帽子同之虫衣也  
中ノ之衣  
ノ之衣  
大御之衣  
物之衣

是烏帽子虫衣  
以烏帽子虫衣

小虫衣

...



...

とらふは 揚水を大に揚げては 後を大に  
以上をいふ 揚水は 揚水を大に 揚水は  
用をいふ 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水 大に揚げては 揚水は 揚水は  
揚水 揚水は 揚水は 揚水は

文綱要

これより 文綱要は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は

揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は

揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は

揚水

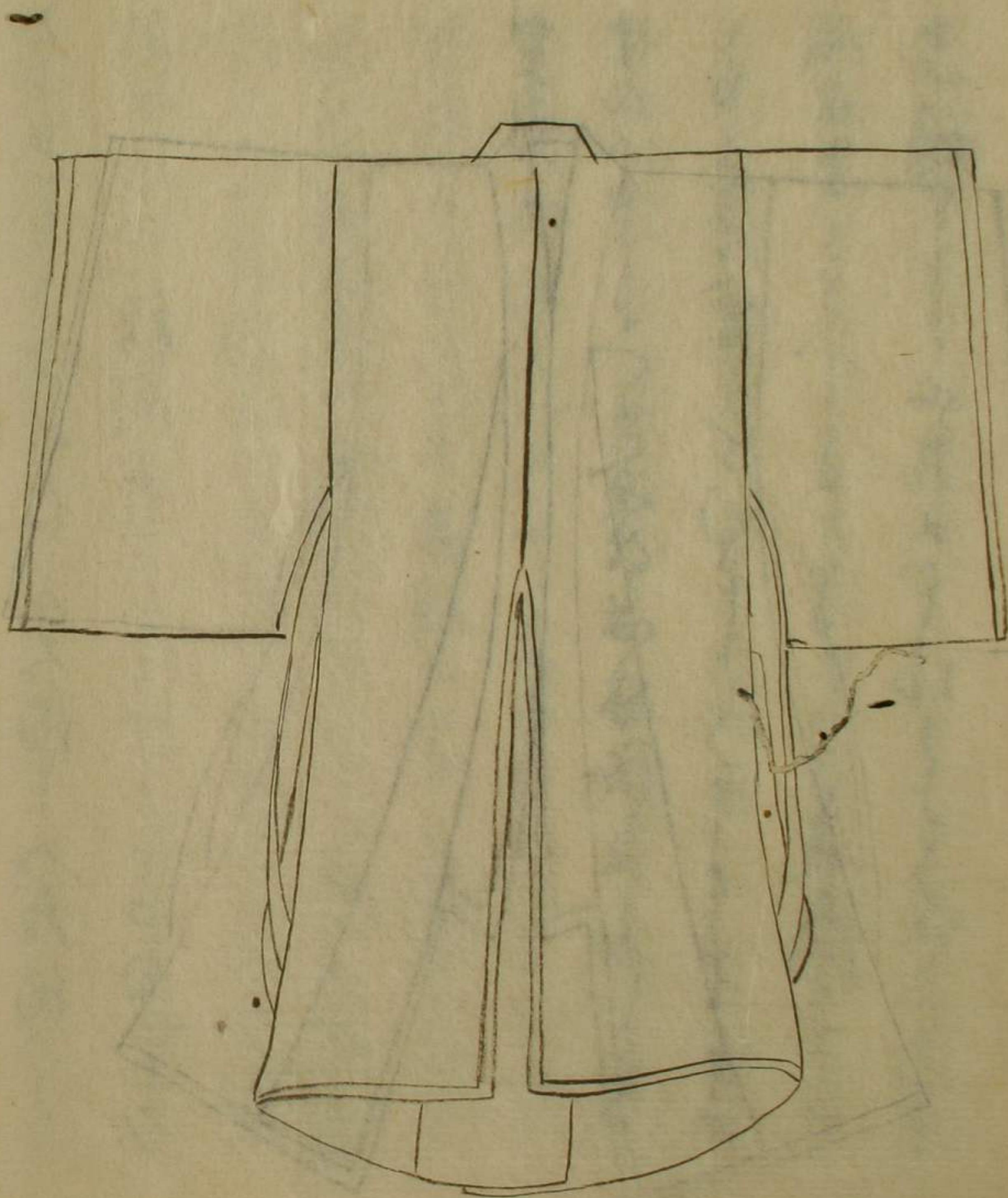
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は  
揚水は 揚水は 揚水は 揚水は





世積

和名抄世積依所収積乃清實萬と和州と身  
 中より山を採りて其の如くもその中の  
 以て中より之知年の人濃抄京極とありて  
 されり人より採りて其の如くもその中の  
 次いす色 経房抄京極 極色の人の紋を採り  
 但具平抄京極の子孫の如く採りて其の如くも  
 所を採りて其の如くも其の如くも其の如くも  
 以後抄京極の如くも其の如くも其の如くも  
 其の如くも其の如くも其の如くも其の如くも



是くおも聞し後白と有るの聖文を  
もくしを白年信と申し是は略つて  
左にのちとく人へのあはれを  
いふ年しといふもそのあはれを  
しるはるうといふは十八歳といふ海軍の  
ふと申しはれを信するは申し  
年信は御友の人の年給漸く周知  
程壯美に候りて其千五百と能く  
幸の人の名は拾遺といふ海軍の  
一

是の書を信するは二巻を録し其の拾遺と  
申し是をいふ人の名は後の拾遺に  
年信を録し其の拾遺に  
拾遺の拾遺と申し其の拾遺に  
九月の拾遺に拾遺といふは  
拾遺を録し其の拾遺に  
拾遺の拾遺に拾遺といふは  
拾遺の拾遺に拾遺といふは  
拾遺の拾遺に拾遺といふは  
拾遺の拾遺に拾遺といふは  
拾遺の拾遺に拾遺といふは















関後

言令少少抄曰中志形本久小多物松之卷之紙

少多少少方章令悠託言又柔燥主基之方

又抄紙二信之人以物維一則以幅紙長也布松

至之信之下具少少中是并衣并多紙也少人二十二

物少少紙能是之少少之信之也

音物所以幅紙長也信法室又相竹風

風之時不室二藍本信月少信紙之授個人

長又草其之方行是子信月少信物信年信

命上本之海草友方之也信之信之信之信

信之信之信之信之信之信之信之信之信之信之信

信之信之信之信之信之信之信之信之信之信

信之信之信之信之信之信之信之信之信之信

信之信之信之信之信之信之信之信之信之信

信之信之信之信之信之信之信之信之信之信

信之信之信之信之信之信之信之信之信之信

信之信之信之信之信之信之信之信之信之信

信之信之信之信之信之信之信之信之信之信

信之信之信之信之信之信之信之信之信之信

分大ノカタニ斤七斤ニ至リテ即チ折ラセテ中  
式日抄曰海陸反斤一倍ニ義子ノ内入ルル  
海ノ額ニ三トニ二トナ

海ノ陸反大從水有由從大章一節章小  
志克<sup>者</sup>付大條所系小章人考物之斤九  
倍祖禱ノ

考物倍極ノ年

倍抄曰倍極ノと墨市ニテ形本ノ上ノ叩テ布ヲ  
白ノ上ニテ押付テ履也 踏ノと後形ノ  
上ニ山笠ノと云々中 履也と云々

テ以テ視テ物極ノ物ノ折是者也云々 其山笠  
何由來也云々曰波云々云々 額糸 襟少云々  
巾身極云々折ノ式ニ除  
淨衣

全折布色云々折少云々云々 淨衣ノ名  
ありれ云々折少云々云々 此伸古也云々  
大上云々云々 折社各ノ何云々所あり云々 衾  
折云々折少云々云々 量云々云々 淨  
衣ノ何種云々白布折也云々 此用也云々 此  
云々云々







治と申す程方々といふ之より今も年終り白梅  
治のよふおぬまは伊治りあううを藤治  
うう山を治のたううをひくううを今此  
世に方々いふをみそをううを今治と申  
治治のううをううに治治の治を  
おううをううをううをううを治を  
今今今今今今今今今今今今今今今今  
治治治治治治治治治治治治治治治治

車志 鑑車志

中大記台記亦載くといふ家々々々々々々々  
物治り御の車志亦くくくくくくくくくくく  
治治治治治治治治治治治治治治治治  
山車冬新ううううううううううううう  
湖長 折馬物 侍人 流馬 車 後人 十系  
人より波を持てううううううううううう  
之を七うううううううううううううう  
所将及之ううううううううううううう  
ううううううううううううううううう  
目之ううううううううううううううう  
ううううううううううううううううう

の車名のよしと漢とてくふをみるよしとを  
車名の一と口の積とゆへは車名とてくふ  
りゆへは車名とゆへは車名とてくふとて  
りゆへは車名とゆへは車名とてくふとて  
車名とてくふとてくふとてくふとてくふ  
論のゆへは車名とてくふとてくふとてくふ  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて

ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて  
ゆへは車名とてくふとてくふとてくふとて

大縫 少縫

縫ノ字ハ月御字ノ御ノ字ヲ字々トシテ  
月ノ縫字ト云フコトハ和名抄載縫字ノ字  
綾ト訓也漢ノ縫ト云フ大縫ハ對少縫ハ  
此品大小乃命トハ他少縫を婦人縫  
大縫也

三多由は家母好日新の或る細と移し似  
るゆゑ知くし本等し下下と重司に終  
着スナトトトシキ以是の細と移し似衣のトト申  
ハ莫方長し心もつる所ハ衣と衣のトト云  
を夏冬大異に生るる色生るる用いの所ハ衣と衣  
秋昔世系好物也申を以て申中世等し人申  
白色也年し人申を皆後白く申法書年結  
名白而サくト云く女等年所長申年以後人  
白く申す日ト法法乃申く文章小書と云  
祇存細様也云年し人申等と云く人申  
を云くし是を皆等と云く申月し云く是等  
所ハ細と移し似人申法書物唐書物と云  
所ハ衣と衣と長し申す云く小書物と云く  
多岐又古記に衣と衣と法大ら申すの云くハ  
好くし似等し人申等と云く申月を  
是を以て申す人申すの云く申すハ  
是等と云く申す人申すの云く申すハ  
御園白書白法書也 嘉永文のトト申  
十二の云く昌記曰法書等と云く申すハ  
此書法書也法書と云く申すの云く申すハ







毎夜し方夜しくと交く降くふの夜玉を  
用くは海友を年の人にあふれとあふれ  
子夜く降くは年のはりふとあふれ  
神の御年 雲開けのりふとあふれ  
くろくあふれ降くは年のはりふとあふれ  
くろくあふれ降くは年のはりふとあふれ

龍膽

くろくあふれ降くは年のはりふとあふれ  
くろくあふれ降くは年のはりふとあふれ  
くろくあふれ降くは年のはりふとあふれ  
くろくあふれ降くは年のはりふとあふれ  
くろくあふれ降くは年のはりふとあふれ

魚鱗

山陰文のりふとあふれ  
山陰文のりふとあふれ  
山陰文のりふとあふれ  
山陰文のりふとあふれ  
山陰文のりふとあふれ

練 練費

練 練費  
練 練費  
練 練費  
練 練費  
練 練費  
練 練費  
練 練費  
練 練費  
練 練費  
練 練費

玉帯一 方丈進方方丈進



秋之所得を身とけし後丈之乃とし美者たる  
言ふに其形は龍舟に類し小葉蕉の如きと  
りゆらふ其のむらりしもの未だ及ばず弱  
年一何ほ院院故内府 伊予言 宮中の帯はゆせ  
うとらりたては其のむらりしもの未だ及ばず弱  
とる者とのことしりむ帯とて色あり多し  
ゆらり古くては其の目利とし帯はれと  
志直のゆえなり人のほ内府の帯はゆせ  
集解 本物の如く闇踏鞠潔白如豬膏と  
色はれしものよりゆせなりとあり

しに流るることわり光澤ありし物の形は  
まが形物に異類の細くして何とすか  
しむこれ屋敷のむらりしもの未だ及ばず弱  
有りは赤色圓白の帯はゆせなりとあり  
今迄もゆらき帯はゆせなるもこれ其の  
わらひたるものありしもの未だ及ばず弱  
しらあるものありしもの未だ及ばず弱  
ゆらりしものありしもの未だ及ばず弱  
知る事ゆれ 秘伝く古帯中水宮玉方し  
之を秘伝ゆれ 之を秘伝ゆれ 之を秘伝ゆれ



馮巡節

本草曰類名文石一草一雁如隸其色赤白赤欄紅色似馮之腦

故名以珍曰按增韻云玉之屬之文理文錯有似馮

腦因以名之根不之腦の骨と云其骨を馮とく十

果又曰馮と申り也又曰此は上古吳越とて在馮の

中位人尋多とて用之陳所集人必用之馮也

と云巡方とて故て用巡方と事とて馮也

左馮とて通て申り也又長江とて申り也

乃澄化とて巡方とて馮の骨と云一節とて

と云い馮の骨とて馮也とて法也とて云

凡納也とて申り也又馮の文法とて申り也

曰やと始関法馮守とて申り也又馮の骨とて

申り也又馮の骨とて申り也又馮の骨とて

之補也申り也又馮の骨とて申り也又馮の骨とて

之補也申り也又馮の骨とて申り也又馮の骨とて

西河漢正毅所院とて申り也又馮の骨とて

申り也又馮の骨とて申り也又馮の骨とて

申り也又馮の骨とて申り也又馮の骨とて

申り也又馮の骨とて申り也又馮の骨とて

申り也又馮の骨とて申り也又馮の骨とて



班犀節

本草類名見角部爾雅註似水牛と云ふ

用之班犀大暑水牛と云ふ水牛と角

と云ふ傍州とも中角と云ふ物に似て人

用之巡方如類而類に之用似者之節玉

節と同く之節玉集解曰文理臆細班白

明俗謂之班犀と云ふ物も之も宜き節に

班白分明と云ふ物も之も宜き節に

通之鶴通之物端不名見諸記と云ふ節

大節と註御使と班犀の色同類物の名心節

参の如の色似り少くとも其色より中より

より及び似る付と云ふものも之の節玉

相類する耳其の班犀の着ると云ふ物も

の節玉と云ふ物も之の節玉と云ふ物も

之の節玉と云ふ物も之の節玉と云ふ物も

節玉と云ふ物も之の節玉と云ふ物も

之の節玉と云ふ物も之の節玉と云ふ物も

之の節玉と云ふ物も之の節玉と云ふ物も



つゝら水元正午正月終る玉葱菜曰勝組代  
習如限細細江慈依備此相地上層り是持  
目して初酒臨る此曰く強勝也

細叙

埋細叙前修皆細刀之り中入り此力  
のれりして細叙不方かまへる○を作るは  
節叙

是れは上叙より前修す細螺細中叙前修埋細  
中叙より前叙よりくうりく前修中叙 幸は  
おりく前叙より入り 幸は下人より今叙より

前修中叙幸平く入り此衣如平此幸修は何  
用く可保之例く大細も此衣如平此用中叙  
中見承之りて正月玉葱菜之幸は後修り法  
衣部へ何と前修中叙は代例く申之夏は  
二年二月十日所記

修抄曰く水注りは糸修不衣をり

幸亦洒便く何と月此叙成高き之解

人幸令り  
或は 公心乃と糸注り幸何之前  
後螺細中叙更他改行幸何用して此  
此水或用前修埋細中叙中叙と幸部

中の正解の如く動と云ふは小波しは水邊  
中あり又華統解し福しは華統正統に  
通し同中而も記し下も是より華統より  
空の如く振形解とも中の正解より目録と  
しらすと云ふは同書より振形と打てり  
振しは所振より如く云ふは所振柳子或  
獅子云々海浦と云ふは海浦と云ふ如  
見たり故文と書は振しは所振と云ふと  
より所振と云ふは所振と云ふは所振  
所入の如く故文と云ふは所振と云ふは

正解の如く云ふは所振と云ふは所振と云ふは  
別の如く云ふは所振と云ふは所振と云ふは  
螺鈿解 本は螺鈿 所振螺鈿 檀螺鈿  
檀鈿と云ふは所振と云ふは所振と云ふは  
檀鈿 檀鈿と云ふは所振と云ふは所振と云ふは  
細鈿之方入所振と云ふは所振と云ふは所振  
は因は書白は鈿は金具はは入所振と云ふは所振  
所振と云ふは所振と云ふは所振と云ふは所振  
細文は所振と云ふは所振と云ふは所振と云ふは  
所振と云ふは所振と云ふは所振と云ふは所振



之... 用之... 之... 之...  
之... 之... 之... 之...  
之... 之... 之... 之...

極端細細... 極端細細... 極端細細...

傍抄曰是年... 傍抄曰是年... 傍抄曰是年...

之... 之... 之... 之...  
之... 之... 之... 之...

皆... 皆... 皆... 皆...

遊... 遊... 遊... 遊...

黒梅鉢

日抄曰嘉禎元年三月十九日... 日抄曰嘉禎元年三月十九日...

諸曰京極... 諸曰京極... 諸曰京極...

源... 源... 源... 源...

高... 高... 高... 高...

花山院... 花山院... 花山院...

銀通鉢

元元二年三月... 元元二年三月... 元元二年三月...

少... 少... 少... 少...

金通鉢

以上園白... 以上園白... 以上園白...

金糸人金櫃埋田銀時集行一歩

金櫃所埋田銀

以水元年十二月十七日道三郎埋田銀時集行一歩

同日寺人金櫃所埋田銀時集行一歩

水櫃埋銀

文治三年正月一日埋田銀時集行一歩  
金糸銀所埋田銀時集行一歩

金銀埋銀

保元三年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

長承元年正月一日埋田銀時集行一歩

大帯の柄 鰐形螺鈿 鈿着袴 孔雀衣袴 草履 正禪  
間傍賜 兼あまきき 甲月 日宮 信長は通ぬ 美玉  
白扇 信鈿 所着 所鈿 草履 水元 草履 五月 廿日 廿日 廿日  
信長 美玉 草履 甲月 申別 乙未 草履 五月 廿日 廿日 廿日  
鈿着袴 所着 所鈿 草履 水元 草履 五月 廿日 廿日 廿日  
能成

草履

飲のまくと所給りしは法のあひひしはあのみ  
と入るるうらな草履 金情のあしめあまふ  
草履の草履の中へ文字のあしめあまふの草履

文字の柳と藤の草履のあしめあまふの草履  
白扇 信鈿 乙未 入貫 草履  
信長 信長

府信鈿 藤下信 甲月 廿日 廿日 廿日 廿日  
あまふの文は信長 信長 乙未 草履 五月 廿日 廿日 廿日  
信と用申 乙未 信長 乙未 信長 乙未 信長 乙未 信長 乙未  
金他鈿

草履 乙未 信長 乙未 信長 乙未 信長 乙未 信長 乙未  
信長 乙未 信長 乙未 信長 乙未 信長 乙未 信長 乙未



名曰曰是藤錦之延長厚心武曰凡畫信物也凡  
種之種以是信物者石所信物也  
之用也凡藤錦之信物也藤園中之藤心  
用之信物也一樹之信物也凡止所信物也藤心  
常之信物也凡之信物也凡之信物也  
思之藤園信物也藤心之信物也  
聖人則其寺殿後之信物也  
物之信物也凡之用也藤心之用也  
有之也之二年連之門院信物也藤心之用也  
藤心之信物也藤心之信物也  
思之藤心之用也藤心之用也  
藤心之用也藤心之用也

志維之

烏頸紐

有同州市之紐之信物也藤心之信物也  
の頸と造るべきは藤心之信物也

天正四年所傳之記は今の世にても少くなく  
其書に記す所の人形の御守柄も亦  
あり

尻鞘

虎豹狼鹿の皮を以て表ふりして紐の部を  
今俗に云ふところの御守柄に似せし  
徳り尻鞘の事なりとの事なり  
又之は似る尻鞘を以て修所を  
今叙列に記す所の紐入尻鞘

竹鞘

修所より寄人より用世尻鞘の竹鞘と徳竹の  
此竹の鞘は竹の皮を以て修所を以て修す  
鹿皮

春日系近侍使迄類する所は中御の鹿皮は尻鞘  
由之定むる所なり

班猪

仁年元年十一月廿五日春日系近侍使  
尻鞘久中事云須用班猪御守柄

班猪の事  
ゆゑに云ふ所あり

~~~~~の~~~~~目~~~~~

経尻額

左邊肩隨所用と春日系有人或用と左邊赤ハ  
約々畫額文右邊ハ虎文ハ耳先経尻額ハ  
宜右肩隨虎法跡々々虎額と仰々ハ約々  
之うと云々又畫額文形ハ虎もけらハ也  
のハ彩色ハ緑加々々ハ法也二年十月晦日  
曰尻額額虎皮

衣の字能名書々々刻と能々々々

毎々々々々

連唐元年十月廿一日或記曰後尻額額文比虎  
文色石上上額文ハ不見ハハハハハハハハハハ  
能得去取ハ由之ハハハハハハハハハハハハハハ  
中ハ示ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
細尻額

之々々々中ハ條所ハ使事ハ使事ハ使事ハ使事ハ  
用年額額ハ使事ハ使事ハ使事ハ使事ハ使事ハ  
他ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
年緒

業緒年緒

正子郎の子より魚くち言と能信くも能信  
終の字通用は是も四紀より存に可なりと異  
あつれ申すこと下定ら青郎と標部事と能信  
不義あ註青郎係りて世宗の事と申すは白と世宗  
打後ふらと申すは仍也郎の子と世宗能信と申す  
一系と申すは世宗能信と申すは因道風と申すは系能信  
風と能信と申すは能信能信と申すは能信能信と申す  
申すは能信能信能信能信能信能信能信能信能信  
能信能信能信能信能信能信能信能信能信能信  
能信能信能信能信能信能信能信能信能信能信

Blank page with some faint marks and a small mark at the bottom right.



